

# 国際理解教育を“自分ごと” にできる教員養成の取組み

教育学部 教授 児玉奈々

## 1. 実践の背景

日本の学校で行われている国際理解教育の多くは、外国の言葉や文化、海外の人々との交流、平和や開発等のグローバルな課題を扱う“外を向いた”ものである。本学部の学生が高校までに経験してきた国際理解教育のほとんどがこの形であり、国際理解教育は遠い外国の出来事を扱うものと広く認識されている。一方、外国人住民の増加という“国内の国際化”に目を向け、身近に暮らす外国人等の多様な人々との共生の意識や態度を育むような国際理解教育の実践は、十分ではない。

また、昨今の外国人住民人口の増加と散在化により、外国にルーツを持つ子どもへの対応は日本のどの学校のどの教員にも起こりうることとなっている。外国ルーツの子どもの受入れに関わり、管理職や日本語指導担当者向けの現職研修は増えつつあるが、学級や教科の担任教員を含むすべての教員を対象とするものは極めて少ない。それゆえに、多くの教員は、外国ルーツの子どもの教育を他人事のように考える傾向がある。

このことから、すべての教員が国際理解教育を“自分ごと”として実践できる力の育成を教員養成段階から行っていくことが重要と考え、教育学部初等教育コース共通科目「国際理解教育論」において取組みを進めている。

## 2. 北米の多文化教師教育の活用

本科目は、移民社会のアメリカやカナダで発展してきた多文化教師教育の理論と実践を参考にしている。

北米では移民の子どもの公用語教育や多様な言語や文化を学習する多文化教育が行われ

てきた。しかし、教師の大半を占める白人教師の関心の低さが課題として指摘されるようになり、多文化教師教育が提案された。ここでは、教師自身がマジョリティとしての白人の特権性に気づき、他者とは異なる文化を持つ一人の人間であることを自覚し、他者の文化への理解と尊敬を深めていくことが目指される。こうした他人事から“自分ごと”への意識改革は、移民等の異文化の子どもたちに対する理解と共感へとつながる。また、自己及び他者の文化への意識が高い教師による支援や実践は、多様な文化を持つマイノリティの子どもの自尊感情や学力の向上等の効果があるとされる。

## 3. 授業の構成と展開

本科目の授業は、①日本に暮らす外国ルーツの子どもの実態と教育、②諸外国における多文化教育の理論や実践、③多文化教師教育ワークショップの三つの内容で構成される。

表1 「国際理解教育論」授業スケジュール

| 内容                             | 多文化教師教育ワークショップ      | グループディスカッション |
|--------------------------------|---------------------|--------------|
| 1. ガイダンス&「国際理解教育」を捉えなおす        |                     | ○            |
| 2. グローバル化と学校                   | 「〇〇人」って誰のこと？        |              |
| 3. 社会統合のあり方の変遷&異文化間ソーシャルスキル    | 郷に入っては郷に従え？         |              |
| 4. 日本の学校で生きる外国にルーツのある子どもの実態    |                     | ○            |
| 5. 日本の学校で生きる外国にルーツのある子どもをめぐる課題 |                     | ○            |
| 6. 多文化への気づき                    | 私も違っている             |              |
| 7. 多文化時代の日本の学校の役割              |                     | ○            |
| 8. アメリカの多文化教育理論に学ぶ             |                     | ○            |
| 9. 諸外国における移民の子どもの公用語学習支援       |                     | ○            |
| 10. 無意識の怖さ                     | ステレオタイプとマイクロアグレッション |              |
| 11. 日本のマイノリティ学校                |                     | ○            |
| 12. 諸外国のマイノリティ学校               |                     | ○            |
| 13. 自己理解と他者理解                  | 自分オープン              |              |
| 14. ゲスト講義の質問準備                 |                     | ○            |
| 15. ゲスト講義                      |                     |              |

①と②を扱う授業回では、教科書に指定した書籍『移民から教育を考える』（額賀美紗子他編、ナカニシヤ出版、2019年）、資料、映像を用いた講義に加えて、グループディスカッションの時間を設けている。ディスカッション実施回の前に、各受講生は課題文献（教

科書一章分)の講読と課題に取り組み、SULMSに提出しておく。授業当日に3~4人のグループに分かれ、各自の課題内容を報告し合い、授業後にふりかえりを提出させる。学生は他の受講生との意見や考え方の違いに触れ、多文化教師教育理論で重視される他者との違いへの気づき、理解、共感を体験する。

③は、北米の大学で採り入れられているワークショップを日本社会の状況に合わせて改編し、グループワーク形式で実施している。

|   |
|---|
| <p>【次のことについて各自で考えてみてください】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. あなたが過去(生まれてから今まで)に自分が「他人と違う」、「他人と異なっている」と感じたり、気付いたりした経験を思い出してください。どのような違いでも構いません。例：年齢、体の大きさ、方言、服装など</li> <li>2. その違いの発見には、どのような場(学校、家の近所など)が関係していましたか?</li> <li>3. その違いについて、その当時のあなたはどのように感じていましたか?</li> </ol> <p>【書き終わったら、グループ内で意見交換をしましょう】</p> <p>【引き続き、次の質問について考えてみてください】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. あなたが過去に感じた違いは、その当時の自分の行動や他者との交流に何らかの影響を与えましたか?それはどのような影響でしたか?</li> <li>5. 影響があった場合、なぜそうなったと思いますか?影響がなかった場合、なぜそうならなかったと思いますか?</li> <li>6. あなたが過去に感じた違いは、今でもあなたの生活や他者との交流に影響を与えていますか?それはどのような影響ですか?</li> </ol> <p>【書き終わったら、グループ内で共有してください】</p> |
|---|

図1 多文化教師教育ワークショップ(第6回授業・私も違っている-I am different-)の実施手順

授業後には、学生がワークショップに参加して考えたことや気づいたことのふりかえりを、SULMSに提出させる。各学生から提出されたふりかえりについて、教師の立場で考えてみるなど発展学習を促すフィードバックコメントを記入し受講生に返却している。

|   |
|---|
| <p>【受講生のふりかえり】今回は、他の人に言われたことが自分にどのような影響を与えているのかについて体験しました。私は身長のことを書きました。改めて考えると、自分は猫背でなぜだろうと考えた時に、身長が低い子に視線を合わせていたり、身長がでかいと言われることが嫌だったのかなと思いました。他の人にとっては羨ましいことでも、言われすぎたりしてしまうと本人は嫌になってしまうこともあるのではないかなと思いました。また、人と違うと感ずることが変えられるものなら変えようとするのだなと思いました。これは、日本に来た外国人も同じで、日本のルールや文化にできるだけ合わせようとしていると同じだと思います。学校も日本語がわからない状況の子が来た時に、同化を求めることがある上にルールも多いため、母国の文化とのギャップを受け入れられない子が多いのだなと思いました。違いを受け入れられるように双方理解していかなければならないと思います。</p> <p>【授業者のフィードバック】あなたの挙げた例のように、人との違いを認識した時に変えられるものであれば変えるという行動を取ることはありそうです。一方で、行動では変えられない違いも存在します。変えられない違いが理由で辛い思いをしている子どもに、教師や学校はどのように対応すればよいでしょうか。考えてみましょう。</p> |
|---|

図2 ふりかえりとフィードバックコメントの例

最終回のゲスト講義は、外国ルーツの子どもの教育関係者(幼少期にブラジルから来日し、学校卒業後、滋賀県内外の日本語指導員や母語支援員の経歴を持つ方)を招いて、学生が直接インタビューを行う。質問は、受講生が授業で学んできたことを踏まえてグループで検討し準備したものであり、「幼少期に日本の子どもたちや教師からされて嬉しかった対応は、どんなものでしたか?」、「外国ルーツの子どもの保護者がどのようなことに困っていると感じますか?」、「日本の学校の教師に、どんなことが必要だと思われますか?」等がある。この質問準備は、受講生が既習内容を整理し、考察を深める機会となっている。



図3 ゲスト講義の様子

#### 4. 実践の成果

ふりかえりやレポートの記述からは、毎週のグループディスカッションやワークショップの「他者」、「文化」、「違い」、「外国人/日本人」、「多様性」等のテーマは、受講生にとって実は身近なものであり、繰り返し触れることで“自分ごと”として捉えられるようになっていく過程を確認できる。最終レポートでは日本の国際理解教育の発展・改善に向けた提案を論じてもらうが、外国ルーツの子どもの指導する教師の立場になって具体的な工夫や実践的な提案を示したものが多くあった。

これからの時代の国際理解教育を実践できる教員を育成する試みとして手応えを感じており、今後もこの取組みを続けていきたい。